

日本語教育実習事前学習で求められること

佐々木馨（お茶の水女子大学・大学院生）

筆者は「複言語・複文化プログラム」の中の日本語教育実習について渡航前の事前学習を3回担当し、実習最終週に教壇実習および前後の指導に同席させていただいた。本報告ではまず今年度の事前学習で取り扱った内容を報告し、それから釜山外国語大学での実習指導の見学、及び指導教員・実習参加者からの意見からみえたこと、それらを踏まえ次回以降の事前学習で求められることについて述べる。

1. 今年度の事前学習で取り扱った内容

「複言語・複文化プログラム」の中で行われる日本語教育実習について事前に考えられた特徴は以下の3点である。

- ① 実習受け入れ校の釜山外国語大学日本語創意融合学部ではCan-do ステイトメントに基づく授業が行われていること
- ② 実習生は教壇実習の前に、学習者の多くが母語とする韓国語を学習すること
- ③ 今回に関しては、実習参加者は学部1年生から大学院生までと幅があり、日本語教育に関する知識や経験にばらつきがあること

上記の特徴を踏まえ、実習参加者が実習での目標を設定できるようになること、釜山外国語大学で行われているCan-do ステイトメントに基づく日本語教育をイメージできることを目標に事前学習が構成された。1回目は過去に自分が受けてきた言語教育を振り返りながらどのような日本語教師になりたいか考え、2回目には自身が韓国に行ったときに韓国語でできるようになりたいことを基にCan-do ステイトメントとは何か、それに基づく授業の組み立て方、教案の書き方について学習した。3回目にはペアまたは個人で作った教案へのフィードバックを行い、教育実習での目標及び行くまでの目標設定を行った。

2. 実習見学を通してみられたこと

実習生の中には事前学習の段階では自分が教師になるのだというイメージをつかみきれていない、実習を通して受け入れ先の先生方の授業や他の大学からの実習生を含む授業を見学し、実習生同士でフィードバックをし合うことで授業・教師のイメージが見えてきたようであった。教壇実習事前指導の際には自分で考えたアイデアを授業で具現化するためにどうしたらよいか、と相談する形で指導を受けようとする姿が見られ、主体的に取り組む様子が印象的であった。

また、直前まで韓国語を学習していた経験を日本語の授業を活かそうとする様子も見受けられた。自身が韓国語学習を通して知った日韓の類似点や相違点に着目して授業内容を考えたり、説明の際に韓国語・韓国文化の特徴を踏まえたりと様々な箇所韓国語学習の成果が実習に反映されていたようである。

実習中の担当教員からの指導として共通に見受けられたこと、そして実習生から挙げられた実習の困難点としては、Can-do から授業を作り上げること、授業中の各活動の目的・意義を明確にすること、授業中の教師の振る舞い、日本語表現の広げ方といった点が挙げられる。

実習生は自身がCan-doに基づく語学教育を受けたことがなく、また、日本語教育に関する知識・経験が十分でないなか、授業の作り方に悩んでいた。釜山外国語大学でもCan-do

に基づくカリキュラムになったのは 2013 年の過渡期を経て 2014 年からとのことで、先生方も試行錯誤を繰り返しながら取り組んでおられるというお話も伺った。お茶の水女子大学からの実習生は B1 か B2、つまりある程度日本語学習を積み重ねており、さらに比較的学習意欲のある学生が集まるクラスを担当することになるそうである。教科書、教材の指定はなく、A1 のような入門のクラスではある程度導入すべき言語項目が共通にあるが、レベルが上がると同じトピックでも想定される場面に幅が出てくるため、教師の力量が試される。釜山外国語大学では 1 週間でトピック 1 つ、という進め方をしているとのことで、今回の実習参加者でも同じレベル、同じトピックの授業を担当しているながらも、扱う内容・項目は実習生によって異なっていた。先生方が共通して指導されていたのは、釜山外国語大学で日本語を学ぶ学生が留学、就職といった日本への長期滞在、あるいは旅行のような短期滞在、そして韓国国内において実際に起こりうる、より具体的な日本語使用場面とそこで使用される言語項目を想定することである。今回の事前学習でも取り扱ったが、一度やればできるようになる、というものではないからこそ、次回以降も Can-do から場面を決めて文法、語彙を考えるという活動を通して場面想定と言語項目の選出について考える機会をもつことが求められる。特に言語項目の選出については時間と資源のある渡航前こそ、様々な教材に触れながら場面と言語をひもづける意識を持つことで少しでもイメージが湧きやすくなるのではないだろうか。

今回の事前学習では教案の書き方についても取り扱った。ひとつの例としてフォーマットを実習生に提示した上で、トピックを選択し教案を考えてもらったのだが、実習生にとっては、授業を考える、教案を書くということも初めてで時間の制限もあったため、教案にはどのような項目が含まれるのか知るというので終わってしまった。教壇実習の事前指導では授業中の各活動について実習生が相談すると先生方からは「なぜそれをするのか」と活動の目的・教育意義を幾度も問われていた。「目標-活動-評価」に一貫性があり、整合性が取れていることは重要である。実習生は先生方からの問いかけによって目標、目的を明確にすることで優先順位が決まり、授業内容を決めていくことができたようである。事前学習で少しでもこういった概念を知っておくことで自身の教案作成時のチェックポイントのひとつにすることができるだろう。授業を考えながら迷った時、困ったときの判断基準になるポイント、あるいは授業案ができたと思ってから確認すべきポイントが少しでもわかると客観的に判断できるようになるのではないだろうか。

授業中の教師の振る舞い、日本語表現の広げ方については教壇実習の事後指導で、授業中の具体的な教師の言動とそれに対する学生の反応から個々の事例に対してコメントされていた。声の大きさ、学生とのインターアクション、雰囲気作り方や質問の仕方、説明の適切さなどが該当する。振る舞いに関しては教師の個性に属する部分もあるが、授業中の教師の言動が学生に影響を与えるということを念頭においておく必要がある。他校の実習生も含め、多くの先生の授業を見学させていただける教育実習という機会だからこそ、先生方がどのような工夫をされているのか注目したいところである。釜山外国語大学での教育実習では実習生同士の授業見学の際にフィードバックが行われている。コメントを受けることで自分の授業の評価も得られるがそれと同時に見学者がどのようなポイントに着目しているのかを知ることができるだろう。渡航前の事前学習では、自分の授業について客観視するところまではできないかもしれないが、自分が受けてきた授業を振り返りながら授業見学の際の注目ポイントなどを整理できると限られた実習期間を有効に使えるのではないだろうか。

3. 終わりに

今回の実習見学を踏まえ、次回以降の事前学習に求められることをまとめると以下のよ

うになる。

- ① Can-do とトピックから具体的な場面と使用する言語項目を想定する練習をする
- ② 既存の日本語教材に触れながら言語項目がどのような場面で扱われているか参考に
する
- ③ 教案の書き方、チェックポイントを整理する
- ④ 自分が受けてきた授業を振り返りながら授業見学で注目したいポイントを整理する

釜山外国語大学で行われている教育実習を見学し、先生方や実習生と意見交換をさせていただいたおかげで次回以降の事前学習で扱うべきことやその比重について把握することができた。次回以降の実習生にとって有益な事前学習になるよう、役立てていきたい。

最後に、実習に随行させていただいたとき、実習生たちが互いに協力し合いながら短期間で大きく変わっていく様子を間近でみせていただくことができたことは非常に嬉しくまた、励まされました。彼女たちが今後どのようなキャリアを選ぶのかわかりませんが、今回の経験は今後の人生に何かしらのかたちで活かされることでしょう。

今回の日本語教育実習事前学習を担当するにあたり、奥村三菜子先生、加納なおみ先生には様々なご指導をいただきました。ありがとうございます。実習中にはお忙しいなか私の質問に懇切丁寧に向き合っていたいただいた釜山外国語大学日本語創意融合学部の先生方、実習随行にあたり様々な手配をしてくださった国際教育センターのみなさま、未熟な私につき合ってくださった実習参加者のみなさん、そしてこのような機会を与えてくださった森山新先生にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。